

英語発音改善のためのメール・グルグルの長所と限界：
対面グルグルとの比較において
“Guru-Guru” One-on-One Pronunciation Training via E-mail:
Strengths and Weaknesses Relative to its Standard Face-to-Face Counterpart

静 哲人
SHIZUKA Tetsuhito

Abstract

The guru-guru method refers to a technique of one-on-one pronunciation practice/evaluation intended for a class of 10 to 30 students. The students stand forming a circle and the instructor walks around (hence its name, which means “round and round”), checking and correcting their pronunciation. The students try saying one of the designated sentences or *items* when the teacher comes around. When a student gets one item correct, she can proceed to the next one in her next turn; when she gets a fail, she has to keep attempting the same item in her subsequent turns. This activity ends when the time limit (typically 20-30 minutes) expires or at least one student passes the last item. This arrangement necessitates one guru-guru session's ending without most of the students reaching the last item. To compensate for this limitation, an e-mail-mediated version of guru-guru, in which audio-recordings are evaluated outside of class, was attempted. Forty English-major undergraduate students were instructed to record their reading of a 42-word sentence and e-mail the audio file as an attachment to the instructor, who would immediately text back his feedback. The students were instructed to keep submitting new recordings until they got a pass mark. During a six-day period, the 40 students submitted a total of 321 files. Within the deadline, 29 students (72.5%) received a pass mark. The post-assignment survey revealed both strengths and weaknesses of this e-mail-mediated guru-guru activity relative to its standard in-class counterpart.

1 背景

リングフランカ (Jenkins, 2000) あるいは国際英語 (有本, 2009) として英語を習得する場合であっても日本語母語EFL学習者が習得せねばならない分節要素はほとんど変わらない。プロソディ面でも日本語母語EFL話者に特徴的な音節リズムと母音挿入は、他の英語話者にとって理解しづらい発話につながる (Walker, 2010)。第二言語学習者の不正確な発音は母語話者にとって “irritating” で “distracting” で “amusing” (Wells, 2018) なものであり、効果的な発音指導は不可欠である。そしてそのための一つの有効な方法が「グルグル」である。

グルグルとは筆者が提唱し、効果も報告している (Shizuka, 2008, 静, 2009) 発音指導法である。学生を大きな円環状に立たせ、教師がその内側または外側をその名の通り「グルグル」歩き回りながら、各学生が Read and Look Up形式で唱える1文を、瞬間的に評価してフィードバックしてゆく。目標文は5～7程度で、グルグルに慣れた教師が学習者ひとりの前で費やす時間は5秒程度である (静・淡路, 2018) ので、1周回するのにかかるのは学生が20人の場合で2分弱である。学生が一度にトライするのは1文なので、すべての目標文に一度で合格する最も熟達度の高い学生の場合には、目標文の数が7文であれば教師の7周回目で最後の目標文に合格する (7周回のためにはおよそ14分かかる)。すべての目標文に合格した学生が出たらその日のグルグルは終了する。実際には1文の合格に複数回のトライが必要となる学生がほとんどなの

で、通常は一度の授業のなかで数十分程度行う。

以上の通常のグルグルを本論文では「対面グルグル」を呼ぶこととする。対面グルグルはよい意味での緊張感を作り出す（小林, 2014）一方、次のような限界がある。(1) 対面グルグルの音声はその場で消えてしまうので記録に残らない。(2) 制限時間が経過したら、または最も優秀な学生がすべての目標文に合格したら活動終了するため、ほとんどの学生は未だに合格していない目標文がある状態で授業が終了する。

2 メール・グルグル

そこで対面グルグルの限界を補う活動として「メール・グルグル」（以下MG）の実践を行い、対面グルグルとの比較してみることにした。MGとは対面での肉声の音声ではなく、メールに添付した音声を評価し、フィードバックを文字によるメール返信で行うグルグルである。物理的に学生が円環状になっていないのですでに「グルグル」ではないが、合格するまで何度でもトライが続くという点を捉えて「グルグル」の呼称を引き続き使用した。表1に、対面グルグルとMGの主な違いをまとめた。

表1 対面グルグルとMGの主な相違点

	対面グルグル	MG
評価対象	その場で発せられる音声	録音ファイルの音声
目標文の長さの制限	作動記憶に入る長さ	制限なし
目標文の数	5～7	1
発話形態	Read and Look Up	音読
アイコンタクト	ある	ない
1回あたり発話回数	1度きり	満足するまで録音できる
フィードバック媒体	口頭での音声	メール本文の文字
フィードバック時期	即時	時間差がある
活動の時間制限	授業時間内の制約	期限内であれば制限なし

対面とメール媒介という違いが、目標文の長さや数や発話形態の違いにもつながる。Read and Look Upを前提とするため長くとも10数語程度の文を複数次々に暗唱してゆく対面グルグルと異なり、MGでは数十語程度の一文のみを題材としてそれが「完璧」に音読できたと教師に判定されるまで、何度も提出を繰り返す。

3 データ収集

3.1 対象クラス・学生

筆者が担当していた英語学科の2年次後期の教職科目「教科教育法（英語）基礎B」において、2017年度後期の学期末課題として実施した。2クラスに対して同一課題を与え、合計40名の履修者が参加した。彼らは学期中「対面グルグル」も音声ファイルの提出も何度も経験していたが、MGはこのときが初めてであった。

3.2 目標文

以下の2文（42語）を目標文とした。英語のプロソディの特徴に関するもので、それまでの授業内容と密接に関連したものである。

“The characteristic stress and intonation patterns of English have a profound effect on the pronunciation of sounds in connected speech. In particular, the fact that function words in English are generally unstressed and reduced makes them almost unrecognizable to beginning ESL students.”（Avery

3.3 注意すべき分節要素と文ストレス

課題詳細はメールの添付ファイルで配信した。ファイル中では目標文で注意すべき分節音 (/dz/ /ð/ /f/ /v/ /l/ /r/ /n/ /æ/ /ə/) の該当箇所をハイライトした。また、文ストレスがくる音節を次のように大文字で示し、それらを概ね等間隔で読む (stress-timed rhythmについては授業中に学習済み) ように指示した。

The CHARacterISTIC STRESS and INtoNATION PATterns of ENGLISH / have a proFOUND effect / on the proNUNciAtion of SOUNDS / in conNECTed SPEECH. / In parTICular, / the FACT that FUNction words in ENGLISH are GENerally unSTRESSED and reDUCED / MAKES them ALmost unREcognizable / to beGINning ESL STUDents. /

3.4 モデル音読ファイル

学生にモデルとして提示するために、筆者自身が目標文を音読した録音を結果的に2バージョン作成した。バージョン1は19秒で140 WMP、バージョン2は28秒、90 WMPである。課題指示と同時にバージョン1を配信したが、最初に提出されてきた数名の学生の音声ファイルを聞き、よりゆっくりと強調して発音したモデルの必要性を感じ、バージョン2を追加配信したものである。

3.5 フィードバックの説明と提出方法の指示

課題詳細のメール指示の一部を、表2として示す。合格するまで何度でも提出を繰り返すこと、再提出の際、どこに注意したのかを明記することとし、修正ポイントの意識化を促した。最終授業の翌日に課題を配信し、7日後の22:00を最終合格の締切とした。

表2 具体的な課題指示の一部

<p>(略)</p> <p>提出されたファイルは、こちらで遅くともその日のうちに聞き、ただちにそのメールに対する返信で評価を伝える。</p> <ul style="list-style-type: none">- 合格の場合は、「合格」など。→ここでめでたく終了- なにか不十分な場合は、不十分な箇所を具体的に書きます。 <p>(例)</p> <ul style="list-style-type: none">- chaRacteristic となっていれば、大文字のRの部分がマズイという意味。- fActとなっていれば、Aがマズイという意味。- ただRとあれば、どこかのRがマズイ- 「シュワ」とあれば、どこかのあいまい母音の曖昧さが足りない。- ただ「母音」とあれば、どこかの母音が何かマズイ- 「リズム」と書いてあればリズムがマズイ。 <p>ただし、私が音声ファイルを聞く時、不十分な箇所が出てきた時点で再生をやめ、その箇所について返信しているので、その先はすべてOKという意味では必ずしもない。ので同じ点がまた後で出てこないように注意。</p> <p>合格をもらえなかった場合は、修正して再度録音し、なるべく早く再度メール添付で送る。その際、本文に、<u>どの単語のどこをどう修正したつもりかを必ず書くこと。</u></p> <p>以下、また合格をもらえなかったら、reduced 3回目、reduced 4回目、とメール件名とファイル名を変えていくこと。最終的に「合格」するまでやること。</p> <p>いずれの場合も、録音したらそのまま送らず、必ず自分の耳で細かく批判的に聞き直し、問題がないと自分では思うものを送ること。</p> <p>合格の締切は、最後の授業の1週間後の同じ曜日の22:00とする。この時点までに合格できなければ「不合格」とする。</p>

3.6 提出とフィードバックの状況

課題を配信してから締め切るまでの7日間は、筆者はどこで何をしていても、携帯しているiPhoneあるいは作業しているPC上で音声ファイルの受信を確認すると、可能な限り即時に、そうでない場合は遅くとも1～2時間以内には音声をチェックし、フィードバックを簡潔に文字で打ち込み直ちに返信した。路上で歩きながら音声を聞き、立ち止まって返信したことも頻繁にあった。未チェック提出ファイルをためないように、とにかく可能な限りすぐに処理することを心がけた。

3.7 質問紙調査

提出された音声ファイルはすべて保存した。また締切直後にGoogle Formsを利用し、(1)最終的に合格したか、また(2)全部で何回提出したか、を再確認し、(3)MGに関する10の陳述に対して同意する程度を5件法で回答してもらい、(4)MGの長所と短所について自由に記述してもらった。

4 結果

4.1 合格率と提出回数

合格した学生が29名、合格に至らなかった学生が11名で、合格率は72.5%であった。提出した回数は最低が1（合格者）、最高が17（不合格者）、最頻値が8、平均値が8.03（標準偏差4.27）であった（図1）。提出総数はのべ321ファイルである。

合格者の平均値は7.03（標準偏差4.07）、不合格者の平均値は10.64（標準偏差3.62）であった。カイ2乗検定を行った結果、Fisherの直接法による正確有意確率が $p = .022$, Cramer's $V = 0.549$ （効果量大）と、不合格者のほうの提出回数が有意に多かったと言える。不合格者は期限ぎりぎりまで提出を続けたわけなので、これは自然である。

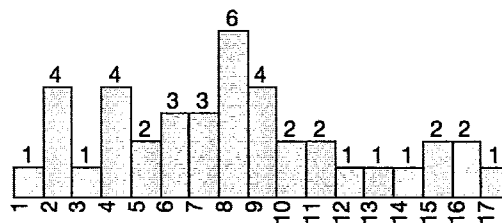


図1 提出回数のヒストグラム

4.2 MGの実態と学生の認識

以下ではMG時の学生側の行動の実態と認識に関する10の陳述についての1（まったくそう思わない）～5（まったくその通りだ）の5件法の回答分布を合格者／不合格者別に示す。陳述0aと0bは行動の実態、陳述1～8が認識に関するものである（以下でFBは「フィードバック」を、TGは「対面グルグル」を表す）。すべての陳述について、回答分布が合格した／しなかったに関係しているかを、カイ2乗検定（Fisherの直接法）で確認した。

【陳述0a】「MGは録音してから自分で聞き直してチェックし、修正し、その時点のベストのものを送った」に対する同意度の分布を表3に示す。平均値が4.70と高く、合格者と不合格者の間に有意な差は見られない（ $p = .44$, Cramer's $V = 0.14$, 効果量小）。この陳述は実態に近かったと考えられる。

表3 陳述0aに対する同意度の分布

	1	2	3	4	5	合計	平均
合格者	0	0	1	7	21	29	4.69
不合格者	0	0	1	1	9	11	4.73
全体	0	0	2	8	30	40	4.70

【陳述0b】「MGでFBがあったら、本当にそうか、さっきの録音を聞いて確かめた」に対する同意度の分布を表4に示す。これも全体平均が4.60と高く、合格者と不合格者の間に有意な差は見られない ($p = .86$, Cramer's $V = 0.07$, 効果量なし)。ほとんどの学生はFBの内容をチェックするために自分の録音を聞き直したようである。

表4 陳述0bに対する同意度の分布

	1	2	3	4	5	合計	平均
合格者	0	0	2	8	19	29	4.59
不合格者	0	0	1	2	8	11	4.64
全体	0	0	3	10	27	40	4.60

【陳述1】「MGはTGと違ってファイルで音声データが残るので、自分でも確認できてよい」に対する回答の分布を表5に示す。やはり全体平均が4.63と高く、合格者と不合格者の間に有意な差は見られない ($p = 1.00$, Cramer's $V = 0.08$, 効果量なし)。この陳述もほとんどの学生の認識に合致していると考えられる。

表5 陳述1に対する同意度の分布

	1	2	3	4	5	合計	平均
合格者	0	0	1	9	19	29	4.62
不合格者	0	0	0	4	7	11	4.64
全体	0	0	1	13	26	40	4.63

【陳述2】「MGのFBは文字なので、TGのFBよりわかりにくい」に対する同意度の分布を表6に示す。平均値が2.95と真ん中のカテゴリーの3に近く、かつばらつきが大きい。また不合格者のほうが合格者より平均値がやや高い。有意な差ではない ($p = .31$) が、効果量は「小」の基準 (0.10) は超えている (Cramer's $V = 0.23$)。この陳述に対する認識は同意と不同意が拮抗しており、不合格者のほうがやや同意する傾向が強いようである。

表6 陳述2に対する同意度の分布

	1	2	3	4	5	合計	平均
合格者	4	8	8	9	0	29	2.76
不合格者	0	1	4	6	0	11	3.45
全体	4	9	12	15	0	40	2.95

【陳述3】「MGのFBは文字で確認できるので、TGの口頭によるFBよりわかりやすい」に対する回答の分布を表7に示す。陳述2の裏返しであり、やはりばらつきが大きい。また今度は合格者のほうが不合格者よりもわずかに平均値が高い。有意な差ではない ($p = .53$) が、効果量は「小」の基準 (0.10) は超えている (Cramer's $V = 0.21$)。

表7 陳述3に対する同意度の分布

	1	2	3	4	5	合計	平均
合格者	1	7	11	9	1	29	3.07
不合格者	0	5	5	1	0	11	2.64
全体	1	12	16	10	1	40	2.95

【陳述4】「MGの『帰れま10』的なシステムは、『逃げ場』がなくTGよりも大きなプレッシャーを感じる」に対する回答の分布を表8に示す。（「帰れま10」とは飲食店の売上の第1～10位を当てるまでその店のメニューを食べ続けるというバラエティ番組のタイトルである。）平均値は3.80で、やや同意できる、といった程度である。合格者と不合格者の間に有意な差は見られない（ $p = .97$, Cramer's $V = 0.10$, 効果量小）。

表8 陳述4に対する同意度の分布

	1	2	3	4	5	合計	平均
合格者	1	5	5	5	13	29	3.83
不合格者	0	2	3	2	4	11	3.73
全体	1	7	8	7	17	40	3.80

【陳述5】「MGでは、指導者の顔が間近にないので、TGよりプレッシャーが少ない」

陳述5に対する回答の分布を表9に示す。この陳述に対しても平均値は3.43で、それほど同意されていない。2を選んだ者が10名もいる。合格者と不合格者の間に有意な差は見られない（ $p = .94$, Cramer's $V = 0.13$, 効果量小）。

表9 陳述5に対する同意度の分布

	1	2	3	4	5	合計	平均
合格者	1	7	5	10	6	29	3.45
不合格者	0	3	2	5	1	11	3.36
全体	1	10	7	15	7	40	3.43

【陳述6】「MGは、合格がむつかしい分、合格した時の達成感が大きい」に対する回答の分布を表10に示す。平均値は4.65と高い。しかし2、3を選んだ学生もわずかにいる。合格者と不合格者の間に有意な差は見られず、（ $p = 1.00$, Cramer's $V = 0.07$, 効果量なし）どちらのグループも概ね同意した、と言える。

表10 陳述6に対する同意度の分布

	1	2	3	4	5	合計	平均
合格者	0	1	3	2	23	29	4.62
不合格者	0	0	1	1	9	11	4.73
全体	1	4	3	32	1	40	4.65

【陳述7】「MGは、自分の発音力の向上に役立った（役立つだろう）」に対する回答の分布を表11に示す。平均値は4.85と全陳述中で最も高く、ほとんどが5を選んでいいる。ただし4を選んだ割合が不合格者のほうが高い。有意な差ではない（ $p = .31$ ）が、効果量小の基準（0.10）は超える差である（Cramer's $V = 0.21$ ）。

表11 陳述7に対する同意度の分布

	1	2	3	4	5	合計	平均
合格者	0	0	0	3	26	29	4.90
不合格者	0	0	0	3	8	11	4.73
全体	0	0	0	6	34	40	4.85

【陳述8】「MGには、TGとくらべて長所も短所もある」に対する回答の分布を表12に示す。平均値は4.25とある程度高い。合格者と不合格者の間に有意な差は見られない ($p = .35$) が、不合格者のほうがやや高く、その差は効果量小の基準 (0.10) は超えている (Cramer's $V = 0.22$)。振り返ってみるとこの陳述は回答の解釈が難しく、文言に問題があったかもしれない。

表12 陳述8に対する同意度の分布

	1	2	3	4	5	合計	平均
合格者	0	1	5	13	10	29	4.10
不合格者	0	0	0	4	7	11	4.64
全体	0	1	5	17	17	40	4.25

4.3 利点と弱点についての自由記述

「対面グルグルと比べた時のMGの利点は何ですか。いくつでも書いてください。」「対面グルグルと比べた時のMGの弱点は何ですか。いくつでも書いてください。」という問いかけに対して、あわせて4735字（一人あたり平均118.4字）の自由記述が回収できた。これらを筆者の目視によってアイデアユニットに整理し、それぞれ件数の多い順からソートして表13にした。（KH coderによるテキストマイニングも試みたが、一人あたりの記述量が少なくかつ内容も似通っているため、目視による整理が適していると判断した。）

表13 MGの利点と弱点についての自由記述内のアイデアユニット

MGの利点	件数	MGの弱点	件数
自分の音声が残るので聞き直せる	20	FBがわかりにくい／唇が見えない	21
何度でもトライできベストのものを送れる	17	FBのテンポが悪い／時間かかる	9
フィードバックが残るので考えられる	9	発音する時プレッシャー・緊張がない	5
モデル音声が何度でも聞ける	8	一発勝負でなく、とっさに話す練習にならない	4
プレッシャーなく、自分のペースでできる	7	自分の口の形を見てもらえない	4
練習時間が増える	4	ダメのダメージ大きい／心が折れる	3
合格するまで繰り返し取り組む	4	FBくるまで緊張・不安だ	3
癖・弱点がよくわかる	4	録音する場所を選ぶ	3
授業外で個人指導が受けられる	4	質問できない／確認してもらえない	2
合格の達成感がとても大きい	3	授業外で時間がかかる	2
友達とアドバイスし合える／競い合える	3	期限のプレッシャーが大きい	1
期限のプレッシャーから本気で取り組む	3	悪循環にはまると抜け出せない	1
FBが細かく、大文字でわかりやすい	2	音声ファイルはツギハギが可能	1
文字を見ながら発音できる	2	対面よりプレッシャーがある	1
より正確に発音できる	2	教師の負担が大きい	1
上達の過程が残せる	1		

利点として挙げられているアイデアユニットに圧倒的に多いのが、モデル音声（8件）、自分の音声（20件）、フィードバック（9件）ともに保存できるというMGの特長に係るものである。その一方弱点としての指摘が多いのは、文字だけのフィードバックがわかりにくい（21件）、またやりとりのテンポが悪く時間がかかる（9件）、という媒体の特徴に係るものである。

興味深いのは、「MGのほうが発話時に対面グルグルよりもプレッシャーが少なく緊張しない」という認識が、利点（7件）と弱点（5件）の両方に挙げられていることである。同様のアンビバレンスは、「1発勝負の対面グルグルと違ってMGは何度も録音しなおせる」という点が、「ベストのものを送れる」という長所（17件）としても、「とっさに話す練習にならない」という短所（4件）としても捉えられている点にも見られる。また「プレッシャー」については、対面グルグルでは教師と間近に対面した一発勝負であることからくるものに対して、MGでは合格までの期限が切られていることからくるもので、性質が違うことがうかがえる。また「ダメ出し」をされた時の心理的ダメージが大きい（3件）、メールが返ってくるまで不安だ（3件）という認識も、顔の見えない状況だからこそと言えよう。

5 考察とまとめ

質問紙に対する回答から、対面グルグルと比べた場合のMGの強みと弱点が明らかになった。文字ベースの返信という限界はあるものの、普段は授業中に対面でグルグルしている教師／学生の間であるならば、音声もフィードバックも後に残ることの利点は大きい。「フィードバックの意味がわかりづらい」という声も多いが、たとえば「R」とだけ書いてどの単語のRが問題なのかを書かなかったのは、教育的な意図に基づいていたこともある。また本論文では実証データを示す紙幅がないが、肝心の音声の質も確かに向上したことは指摘しておきたい。教室での指導と相補的に用いられるMGは、学生の発音スキル改善に大きな効果が期待できることが今回の調査でも明らかになった。「文字だけのダメ出しが心に刺さりすぎることがある」という声があったことに留意しながら、今後も指導の中でMGを適切に活用してゆくつもりである。

備考

本論文は、2018年6月16日に筑波大学 東京キャンパス文京校舎において開催された外国語教育メディア学会（LET）関東支部第140回（2018年度春季）研究大会において筆者が行った同名の口頭発表をもとに加筆したものである。

引用文献

- 有本純（2009）『英語の発音指導法の開発：国際英語の観点にもとづく導入から矯正まで』科研報告書（課題番号18520470）関西外国語大学。
- 小林翔（2014）。「グルグルの成功のコツは失敗から学ぶ」静哲人・正頭英和・小林翔『英語授業の心・技・体：小・中・高・大で変わらないこと』研究社，pp. 140-145。
- 静哲人（2009）『英語授業の心・技・体』研究社。
- 静哲人・淡路佳昌（2018）. 小学校教員対象のグルグル発音指導の効果：ウェアラブルカメラ映像と事前・事後パフォーマンスの比較. 関東甲信越英語教育学会第42回栃木研究大会，予稿集，p.30.
- Avery, P. & Ehrlich, S. (1992). *Teaching American English pronunciation*. OUP.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. OUP.
- Shizuka (2008). Backwash of performance testing: Auditory and acoustic analyses of an utterance recorded before and after an EFL pronunciation course. *JLTA Journal*, 11, 41-60.
- Walker, R. (2010). *Teaching the pronunciation of English as a lingua franca*. OUP.
- Wells, J. (2018). Don't be afraid of intonation! (Special Invited Speech). *The 57th JACET International Convention (Sendai)*.